東寺觀智院金剛藏『關東山内諸堂建立事』(108箱5号)の調査報告と翻刻

湯 浅 吉 美

はじめに

東寺觀智院金剛藏聖教類覽調査報告の一編として、今回は標題資料を採りあげる。諸般の事情から、当初予定していた資料の翻刻を完了することがかなわず、倉卒の間に本稿を作成した。このような為体は、第一に資料に対して申し訳ない。自らの非力に恥じ入る次第である。

報告に先立ち、東寺(教王護国寺)に一昨年入られた飛鷹全隆猊下に衷心より御礼申しあげる。また、本資料の閲覧を許可された当時には、先代の砂原秀遍大和尚が長者であられた。気さくで温かいお人柄を今あらためて懐かしく想い起こし、併せて御礼申しあげたい。続いて、東寺、同宝物館、觀智院の皆さまに満腔の謝意を表す。別けても、山田忍良師と新見康子氏とに感謝申しあげる。

報告わずかに毎年一点であったり、調査後幾年経つても採りあげられなかつたりと、折角の御厚意に応えられないことが多々あるけれども、何卒御目永う御厚情を賜つて、今後とも調査を継続させていただきたいと願つている。

また、先代故橋本照稔殿下ならびに現董岸田照泰殿下をはじめ、大本山成田山新勝寺と同仏教研究所の皆様方の御高配にも深謝する。すでに三十年以上にわたり、地味な基礎研究に対して惜しみなく御支援を賜るがゆえに、傍から見れば道楽にも等しい仕事を続けていられる。就中いつもいつも実に辛抱強くお待ちくださる仏研事務局の伊藤照鏡師には、まったくお詫びの言葉もない。感謝の微衷を汲み取つただければ、と常に念じている。

なお、今回は都合により、書誌事項の記述と全文翻刻の提示とのみに止める。鎌倉北条氏が東寺に寄せた信仰を窺ふことのできる、まことに好個の資料であるが、何分にも門外漢なので、すべて今後の課題とさせていただく。外題左傍、題署らしきものに注して「廣本」とあること

からすると、別本（略本か）の存在が想定されるものの、それを搜索する術がなかった。残念ではあるが、諸賢の御諒解をお願いする。むしろ、然るべき識者の御教示を待ちたい。

《書誌事項》

關東山内諸堂建立事 一卷 (108箱5号 『目録』^⑤ 323頁)^①

〔鎌倉時代後期〕写 一軸^②

〔装訂〕もと卷子装。軸は外れて別にあり。全長四米八二・八糎。

〔表紙〕なし。外題「關東山内諸堂建立事」(直接墨書)。

左傍に「□：□養記録廣本」とあり(外題と異筆、直接墨書)。

〔見返・遊紙〕なし。

〔序・目録〕なし。

〔本文部分〕内題「關東山内諸堂建立事」。斐楮交漉紙、紙数一一、標準一紙長四三・九糎、^③紙高三〇・〇糎。

無辺無界、每紙行数二一乃至二四行、每行字数不等、字面高さ約二八糎。訓点等なし。第一紙に裏書あり。

〔尾題・奥書〕なし。奥巻なく、後欠と見ゆ。

〔その他〕特記事項なし。

注

① 『目録』は、京都府立総合資料館編『東寺観智院金剛藏聖教目録』(京都府教育委員会、一九七五・八六年)を指す。以下の書誌事項には『目録』と相違する計測値などもあるが、報告者の実見・実測したところを提示し、とくに必要のない限り指摘・注記はしない。なお、報告者は書名決定の第一典拠を内題に求める立場に従う。『目録』は原則として外題を採っている。

② 『目録』では「正応四年写」(一二九一)とし、ほぼその頃と見てよいと思うが、後欠らしく奥書などはなく、確たる根拠は見当たらない。数箇所その年号が見えるのに拠ったのであろうが、これは書写年を示していない。

③ 標準一紙長とは筆者が書誌事項の報告をする際に使用している造語である。文字どおり、当該卷子本を構成する料紙一紙の標準的横長を意味する。原則として最頻値(モード)を採るが、継ぎ目糊代に伴う誤差の範囲内において複数の最頻値が出るならば、その平均を採る。もともと複数種類の料紙が用いられている場合には、それぞれの標準一紙長を記載する。事々しいように思われるかもしれないが、一葉ごとに採寸してゆくと、料紙利用の様態が鮮明に浮かび上がってくる場合がある。たとえば、時や人を異にする書き継ぎ、推敲に伴う切断など。

《翻刻例言》

- * 改行、傍記、小字片側寄せ、小字双行などの体裁は原本どおりとする。文字の大小、配置なども、努めて原本の態様を髣髴せしめるよう心掛けた。ただし、字間の空きについては十分に再現してはいない。
- * 用字については以下の方針に従う。
 - ・ J I S 内漢字および『今昔文字鏡 単漢字 10 万字版』（東京、紀伊國屋書店、二〇〇一年）の「TrueType フォント」を用いて表現可能なものは、原本の字形を活かす。したがって、同じ字の新旧あるいは正俗の混在する場合がある。
 - ・ それ以外の別体字は、右の範囲内に存する最も適当な文字に改め、必要に応じて翻刻注を施す。
 - ・ ごくふつうに使われる別体字は、殊更に原本の字形を出さずに通行字体を用いる（例えば、高↑高、職↓職、弘↓弘など）。
- ・ 文字の筆法によっては、筆写者がどの字形を書こうとしたものか判然としない場合が少なくない。その際は概ね通行の字形を用いる。
- ・ 原本の字形を残すか、通行字形に置き換えるか、その判断にややゆらぎがある。とはいえ、よほど用字法などの検討にでも踏み込まぬかぎり、あまり厳格に呻吟することはむしろ無意味であろう。
- ・ 本資料においても、大と太、小と少など、他の資料でもふつうに見られる異字通用がある。これらについては、翻刻には原本にあるとおりの字を出し、一々（ママ）を付けなかった。この方針によると誤植の識別が難しくなるが、報告者は無闇に（ママ）を付けるのは好ましくないと思っている。なお疑わしい場合には、報告者まで照会されたい（y.yuasa@saijaku.ac.jp）。
- * 括弧（ ）内は、報告者の加えた字句である。
- * 毎紙、冒頭に紙数を示す。

* 「E」Xでは注の管理がすこぶる容易なので、原本所見

に係る翻刻注は全て注として末尾にまどめた。なお、

この点は「E」Xを採用するメリットの一つでもある。

ところで、前回から翻刻注を漢字・カタカナ交じり

文としている。御意見を賜れば幸いである。

* その他、一般的な翻刻に準じて解釈されたい。

《付記》

* 小稿は報告者自身が日本語版「E」X_{2e}(角藤亮氏によるいわゆる角藤版「E」X_{2e})で組版し、大島利雄氏公開の“Printout for Windows” version 3.11.4によって

印刷出力したものを版下として使用した。

* JIS外漢字を組版するため、『今昔文字鏡 単漢字

10万字体』(東京、紀伊國屋書店、二〇〇一年)の

TrueTypeフォントを使用した。当該フォントの著作

権は株式会社エーアイ・ネットならびに文字鏡研究

会にある。

* 前項のフォントを「E」X_{2e}上で使用するに当たり、堀

田耕作氏によるフリーウェア Mjfonts パッケージを

利用した。

* これらのソフトウェア等を開発・公開された諸氏に

心より敬意を表する。

(後補外題)
關東山内諸堂建立事

(異筆)
□：□養記錄 原本

(第1紙)

關東山内諸堂建立事

一 最明寺 最明寺禪門建立之

一 法光寺 最明寺入道殿逝去之後故相州^時建立之
仍号法光寺

一 日輪堂 今改日輪寺法光寺殿建立之
安置五指量卅万駄像 八角円堂也

一 利生殿 如意輪堂 前相州母儀禪尼為相州祈禱
建立之

一 鎮守三所 一 所權現 宮根 法林文殊 女林觀音 俗林
弥勒 伊豆千手

一 鐘樓 鐘樓之樓門也

一 經藏

正應四年三月十一日々輪寺御修理依修造功被供養之

此内今度修理供養日輪寺^①

法印^{良實}今度修複供養^②之次利生殿并鎮守三社^③

鐘樓經藏可副供養^{云々}三月四日被遂供養仍愚身

可勤唱導之由可觸送之旨以使者二人<sup>安東新左衛門尉
塩飽三郎兵衛尉</sup>

申送佐々目^{云々}二月廿八日秉燭之程大納言僧都来示云

日輪寺供養可為来月四日可為平座曼荼羅供職衆八口日

輪寺供養可被勤大阿闍梨之由相州申送之可為何様乎^{云々}

期日不幾就世出世尤雖有斟酌遮而召請之上者争

(第2紙)

可及豫残乎早可申領狀之由返答了又施藥院使

長光送狀^二 唱導御勤仕事治定之由相州

以自筆狀只今被仰之彼狀一覽之^{云々}^④

件狀云来四日日輪寺供養唱導事可為親、法印

御房之由只今既治定了此条尤可宜欵如何每事期

面謁候者也恐々謹言

二月廿八日

施藥院使殿

長光返状云

来四日日輪寺御供養事太政法印御房可為唱導之由
謹以奉了此条以外德化候欵當時も随分被奉致
懇祈候云々且社務も定欣感無他事候ぬと存候
為之如何恐惶謹言

二月廿八日

長光上

廿九日又親助僧都送状云忝可被出支度早可書給
且可加一見之由僧正被示云々

一 支度事

注進 三月四日々輪寺供養曼茶羅供支度事

合

四色佛供 米壹斛^①
油一

燈明 油一升

佛布施一裹

(第3紙)

名香 一裹

八供養壇一面

脇机 二前

燈臺 四本

礼盤 一脚在半疊

壇敷絹四丈

右注進如件

正應四年二月廿九日

此支度以先々引懸弁法印令見了神妙之由申之
四日延引之由又本所申送之可為庭儀之間諸事依難整
也職衆今二人加増又重出追支度了

一 支度事者今度弁法印等^ニ申談可出之由僧正御房被

右注進如件

示之間加一見了存知分支度又本所用意等之物各

正應四年二月廿九日

別可出之

此支度愚存分如此今度不用造花時花也葩^ハ可有

注進 来十一日日輪寺供養曼荼羅供支度事

用意之由庭行事奉行人^ニ對面之時令申之

合

一本所可有用意物

造花 五瓶并四面關伽料

散花机 在地敷覆 花莒 在葩 經机 庭机

名香一裹

縵在幔畫 莛道

佛布施一裹

一 阿闍梨可用意物

燈油 一升

八供養具 鍍五色等如常 鐺鉢二具 法螺二

八供養壇一面

玉幡二流

脇机二脚

持幡童裝束二具 皆具

(第4紙)

已上 如此被出之今度者支度之外悉僧正

燈臺 四本

被致其沙汰了但莛道經机花莒葩等所用意也

礼盤 一脚

一 宿所事

最明寺禪興寺此兩所之間可相計之由本所被示之間
依為近々以最明寺廊為体所自十日夕方被移住于最明寺
了

一出世之作法先師法印六條若宮塔供養之時之儀定
用意了但法具ノ中如意今度略之了
一道場莊嚴事

一 作法等事

以當流存知分每事可執行之由僧正示給之職衆十人内
八人僧綱二人已講分衲甲者六人者衲衆四人者

(第5紙)

可為甲衆之處甲衆四人内僧綱二人可有之間僧綱

者着紫甲凡僧者着青甲之條可為何様乎之由有

評定上古者僧綱希之間不及別子細仍傍例不存知之

間只為皆甲之由定畢仍不着衲袈裟僧綱ハ紫甲

凡僧青甲如常也自余之外儀者如當流之傳法灌頂

今度不立庭之机玉幡法螺等置衆會所之傍臨

其期役人等取之了

本所奉行入自十日夜參住堂莊嚴前日大略整之
内道場事者頼瑜中納言僧都致其沙汰了⁵⁾

當日午一點僧正來臨覽對面其後被臨聽聞所

其後又施主暫平禪門之宿所被立入 職衆少々

着衆會所之時施主來臨乘輿力者十二人 着衣

禪門并子息兩人其外若黨不知其數今日供奉之

輩引刷^{云々}

一道場指圖有別堂之東之縁仁指續假屋為

相州之聽聞所施主相模左近大夫僧正三人者

會合一所其次ノ間一間仁親近之供奉人四十

人計群集了外陣結構假屋供奉之侍入道

俗不知其數群集西ノ假庇二間北方并相州之

御母儀禪尼已下御方足助之禪尼等群集云々

一上堂烈等事

先付催職衆參集會所各守悵文之左右着座

(第6紙)

如傳法灌頂職衆已下庭役人等皆參整之時行

事僧阿闍梨ニ申案内此時愚身最明寺廊妻戸

前立出 從僧二人指貫裳袈裟 下活ヲ着尻切 大童子二人如木 着柏 ⑥

躡踞于庭上力者四人進出各法具賜之居箱香

呂箱座具草座如此整之後下踏脫步行出立

門乘輿手輿 自石階至于門前此時扈從僧綱賴瑜

門内ニ相儲而令氣色阿闍梨未入門内之以前職衆

自集會所立列聊行延之時儲蓋其時愚身立中央

筵道十弟子相從

一行烈次第

讚頭進出下藹先如常持幡童職衆之次立左右之

筵道邊次大阿闍梨 中央之筵道 次十弟子四人

左右筵道ニ悉立整之後讚頭發音讚一反終

亦讚出之讚終鉢鉢拍子推之即始行烈此時 ⑦

法螺吹之貝吹鏡持等筵道之外二行立鈍色

裳袈裟狩袴登立之時甲衆大床之西ニ群集

衲衆同相從東ハ施主為御聽聞所之間西ニ立集了

登時一行先讚頭止鉢音一人登相鉢之仁ハ留下

不止音其作法如常阿闍梨正面ノ大床仁立之時

十弟子左右ノ脇ヨリ置法具ヲ二人立帰テ玉幡ヲ

取テ内陣ノ妻戸ノ際ニ自本竹ヲ立儲テ紙捻ヲ

用意結付之十弟子立帰之後阿闍梨寄礼盤之前

(第7紙)

置檜扇取香爐三札置香爐登札盤其後

納衆始無言行道、畢諸僧着座之後取

香爐念珠而惣礼示敬諸僧不始惣礼之間密々惣

礼卜催了西座之一藹豪澄僧都令氣色其時

諸僧惣礼々々畢先方便 次結界等次驚覺

鈴 次阿闍梨取香爐念珠不取五古之時法用頌

出之法用等畢 次開眼 次表白 仏經尺

今度依為長座可事延之間表白經尺等只一段

勤之了次說法了敬白 次讀願文

次揚經題 次發願金一打 持經於左手 次五大願 次一切

誦誦金一丁 次心經金一丁 次誦誦文讀之金三丁

次金一丁 誦誦文 次四弘⁹

次佛名

次教化了終テ 廻向大并一丁今度只誦誦¹⁰

文等一通也

次神分 抑三密修行之處、

次供養法 如常

次廻向句護持大施主成、 增長福壽、

供養法了下札盤取香呂三札取檜扇着平

座此時十弟子来居箱香呂箱ヲ 移置于下座¹¹

一人ハ座具取之令持 其後承仕二人来而壇并

(第8紙)

札盤脇机等取去之 其後阿闍梨之布施置之

綾被物五重

一番八條三位盛長置之

次一條三位公冬置之

次源中将顯資

次近衛中将實香¹²

次一条新中将能成

褁物一 納染物十

砂金五十兩

十弟子進寄徹之出自正面此時大童子寄登¹³

階之際請取之阿闍梨布施撒之後置職衆布施

被物二重 褁物一

承仕入自後戸撒職衆之布施其後又阿闍梨之

御前ニ置加布施盛長卿入自正面銀釵置

之自簾中五衣領押出之盛長立上^テ

聊令氣色之時公冬來取五衣置阿闍梨之前

其後庭上之薙道内東行之薙道可取去之由

行事 法橋加下知其後被引御馬上手¹⁴

長崎新左衛門尉^{狩衣}下手^右同四郎左衛門尉¹⁵

者黃香狩衣從僧二人内上首^{慶賢}進寄^{都維那}

請取之于時大童子二人内一万丸寄請取之

(第9紙)

彼僧下人^{清弘}男取之¹⁶

其後薙道又如常敷之賴瑜僧都來蹲踞

阿闍梨御前取銀釵被渡于賴瑜從僧二人之内

下藪實円寄登階之際請取之大童子又取之

渡于力者其後阿闍梨立樣ニ五衣右御手ニ懸之

下座至于正面之時賴瑜僧都立向^テ請取之賜于

從僧了其後正面之西脇ニ令立寄給之時職衆

出自正面引烈此時持幡童取玉幡持幡

童退出之間無其儀然而中々不及沙汰無音

一人依急事早出欵還烈如常

阿闍梨有御帰最明寺廊覽休息之處僧正

御房來臨有御對面相州殊感嘆今日依

物忌不遂面謁以見參之次可述心緒之由可

申也云々僧正御房被仰云無風雨之難儀式之

嚴重佛經讚嘆無所漏率介之唱導

心苦相存候之處諸人稱美就中施主17

隨喜以外被感申候之条殊以所悅存也云々

賴尚 政鏝 賴雄 寬增

庭行事

周坊有俊法橋18

持幡童

徳有 松菊

執綱

明名民部大夫 執蓋 嶋田民部大夫

横山左近將監

從僧二人

慶賢 播磨都維那 實円 加賀都維那19

承仕二人

同行 教恩

螺吹二人

承勒 常音

職衆夾名

法印權大僧都能嚴 法印權大僧都公寛咒願

法印權大僧都聖瑜 權少僧都 豪澄散花

(第10紙)

權少僧都 賴瑜 權少、、親助

大法師 賴賀 權少、、賴任讚堂達

十弟子

大童子二人 常音 熊王丸 ^②

一万丸 熊王丸

一 御布施取夾名

(第11紙)

八条三位盛長 一条三位公冬

春日源中将顯資 近衛中将實香

難波刑部卿 中御門前少將實淳

一条新中将能成 宮内大輔遠業

河内大夫 星野四郎藏人

手長役

諏方三郎左衛門尉 荻野 馬允

大鷹 中務 大森三郎左衛門尉

安東平七右衛門尉

御馬引

長崎新左衛門尉 同四郎左衛門尉

一 大阿闍梨御装束事

法服衲横皮

衲横皮者 累代相承之古物 袍裳者 佐々目傳借之

從僧事

可為表袴装束之由被申之庭儀之時從僧

下行物事

御厩舍人有來申子細之間酒肴用途五連下行

自宝藏可有沙汰之由小別當申之他所事依人不同云々

大童子御力者事

装束料各々一結三連下行之

(後欠ナルベシ)

(第1紙裏書)

文永九年^{壬申}十二月十日^{甲午} 戌時²¹

鎮壇 地鎮 定清僧正^{于時} 勤仕之^{法印}

同十年六月一日^{鬼宿} 御供養

御導師 二条法印^{良寶}

自即日被始供養法

供僧三人

上旬 二条法印良寶

中旬 能海中納言法印

下旬 嚴譽二位僧都

一向面々以門弟六人勤仕也

注

- ① コノ行、墨抹。
- ② 法印：供養、墨抹。
- ③ 一、不明字ヲ擦消シテ重書。
- ④ 油一、擦消。
- ⑤ 頼瑜、擦消。
- ⑥ 活、ママ、「括」ナルベシ。
- ⑦ 鉢鉢、ママ、「鏡鉢」カ。
- ⑧ 金丁、ママ、「二」ナドアルベキカ。
- ⑨ 行頭「次」ノ下ノ空格、ママ。
- ⑩ 了、擦消。テ、「了」ヲ擦消シテ重書。
- ⑪ 移、不明字ヲ擦消シテ重書。
- ⑫ 衛、擦消シテアルガ如シ。
- ⑬ 徹、ママ、「撤」ナルベシ。
- ⑭ 手、不明字ヲ擦消シテ重書。
- ⑮ 崎、旁ヲ「寄」ニ作ル。
- ⑯ 彼、ヤヤ存疑、「被」カ。男、擦消痕ニ重書。
- ⑰ 美、擦消シテアルガ如シ。
- ⑱ 坊、ママ。
- ⑲ (實円ノ) 都維、擦消痕ニ重書。
- ⑳ (双注ノ) 常音・熊王丸、擦消。
- ㉑ コノ行ガ第1紙ト第2紙トノ継目ニ乗ル。